

と乗船させなかつたかと思う。私達五百人ぐらいた。
千人は乗船できたと言う。

昭和二十二年四月二十日に上陸。ソ連の汚れた服
だったので旧海軍の新服をもらった。舞鶴ではタバコ
がバラで二十本、金三百円、家までの汽車の切符、電
報は何本打つてもよかつた。

一週間ぐらい舞鶴にいて臨時列車で出発、四月三十
日か五月一日頃と思う。京都から汽車で五十分ぐらい
手前の園部駅。家の窓から日の丸を振って、ホームで
は婦人会の人たちが水筒にお茶を入れていて、男女青
年団がツツジ、菜の花の束を皆にさしてくれ、子供は
新聞をくれ、その後青年団が「赤とんぼ」の歌を歌つ
てくれた。感無量だった。良き思い出になった。

京都に四時着、ここで各方面行き列車に分かれ
て、そして八時出発。家に着いたのは五月三日夜だつ
た。

栄養失調で三島市国立病院に通い、八月に結婚。男
子一人女子二人授かり、孫も出来、今は曾孫もいる。

昭和二十二年、近所に郵便局があつたので十月二十

五日入局、昭和五十一年三月退職。

私の人生は長かつた。今八十二歳になろうとしてい
る。

抑留記

滋賀県 白井 末一

私は、昭和十八年二月一日、現役兵として熊本の野
砲兵第六連隊補充隊に入隊した。そこで二カ月間の基
礎教育の後渡満し、三江省富錦県富錦の第七独立守備
砲兵隊に転属した。

第一期の初年兵教育終了後に幹部候補生を志願し、
選抜試験を経て念願の甲種幹部候補生を命ぜられて、
昭和十九年一月二十日、豊橋陸軍第一予備士官学校に
入校した。

八月十四日同校を卒業し、晴れて見習士官を命ぜら
れ、再び原隊復帰し富錦へ帰り着いてみれば、第七独
立守備砲兵隊は富錦駐屯砲兵隊に改編増強されてい

た。

昭和二十年一月十日現役満期、一月十一日予備役編入、引き続き臨時召集により富錦駐屯砲兵隊に編入され、少尉に任官した。五月一日、佳木斯一二三四師団砲兵連隊に転属し、松花江南岸の大羅勒密陣地構築に入った。

昭和二十年八月九日、ソ連軍は、満ソ国境を不意に突破して満州に侵入した。命令により、陣地を撤退して方正南方約二キロメートルの守義屯に向かった。

八月十五日終戦となり、八月十八日、全部隊が守義屯に集結し武装解除となった。この時、将校の軍刀だけは引き渡しの命令はなかった。ソ連の差し回した客船に乗船するよう命令が届いた。誰言うもなく「ウラジオストック経由で、日本へ送り還される」という噂が広まり、表面は一応平静になり、八月三十一日夜、伊漢通において乗船、松花江から九月四日入ソした。ハバロフスクの石炭埠頭に上陸して家畜用の敷草を敷いた貨車で輸送されたが、のろのろと進み随分時間をかけ、九月六日、鉄条網を張り巡らし四隅に高い監視

用の望楼のあるドルミン収容所に入所した。その後は山林伐採作業に服した。以降の作業はすべてノルマを要求され、栄養失調で倒れる者も出た。

「ウラジオストック経由で日本へ送り帰される道中の日待ちだろう」と勝手に思っていた。ドルミン収容所では当初、軍刀を吊って作業の指揮をしていた。しかし、遂に所持することができず取り上げられてしまった。

昭和二十一年二月二十三日ポリオットナヤ収容所に転所し、山林伐採作業に服した。四月二十四日クラスナヤレーチカに移動、煉瓦工場・製材工場の作業に服した。煉瓦工場での煉瓦の窯出しの時は、体中煉瓦の粉だらけになって働いたことを思い出す。

昭和二十三年四月十二日ハバロフスクに転所となり、六月十日同所を出発し、ナホトカへ到着した。

六月二十五日ナホトカ港を出帆し、二十七日舞鶴港上陸、同日、復員することが出来た。

シベリアでの捕虜生活を経験したが、果たして本当に日本に帰れるのだろうかとは何度思ったかしかない。

舞鶴港の棧橋に着いたとき、本当に祖国日本に着いたと感無量だった。これからは誰も捕虜生活をしなくてもよい、多くの犠牲者を出さない平和な社会であってほしいと祈るものである。

シベリア抑留記

滋賀原 川端 増雄

生年月日 大正六年三月十八日

現役入隊 昭和十三年一月十日 満州国東安省半

截河 満州派遣軍第五十部隊

応召入隊 昭和十九年七月十七日 京都第四十部

隊(野砲)

昭和十九年九月三日、駐屯地北海道網走から一路、千島列島エトロフ島に向かう。悪天候を衝いて約三トンの機帆船に野砲二門を積載し出発。時化のため船は真つ二つに割れて遭難、近くにいた海軍防衛艦に救助

され、無事エトロフ島の目的地に到着。ここで軍の編成が終わり、三井隊に編入される。直ちに大隊本部勤務を命ぜられ、終戦まで従事。主に經理処理を担当。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の終戦宣言を営庭にて全員集合の上拝聴、戦争終結を知る。

八月二十日、三井隊より長期勤務者七人(本人を含む)に対し、エトロフ島で現地満期を命ぜらる。衣服・食糧をもらって除隊。島の東の方に行って船を探したが情報は得られず、船もなく、とにかく近くの洞窟で五日間ほど暮らす。近辺に地方人がいたが船の状況についてそれらしい情報も得られず、食糧もなくなり途方に暮れて、元の三井隊に入隊しよう中隊への連絡をとり、ようやく再入隊が認められ、七人は本隊に復帰させてもらう。

九月十五日、ソ連軍がエトロフ島に上陸、エトロフ・トウネイ飛行場にて武装解除される。約一カ月間、ソ連兵監視の下に兵舎にて船を待つ(北海道へ帰るためだという)。

十月中旬、船がエトロフ港に入ってきた。約三千ト